

馬介在活動センターにおける野外展示パネルの制作

田口 愛（帝京科学大学 環境教育・インタープリテーション研究室）

指導：古瀬浩史

キーワード：フィールドミュージアム、馬、展示パネル、OPEN AIR LAB

1. はじめに

2018 年現在、帝京科学大学東京西キャンパスでは、フィールドミュージアム「OPEN AIR LAB」の構想が進められている。「フィールドミュージアム」とは、フランスを起源とする「エコミュージアム」とほぼ同様の概念を示す言葉として用いられている。エコミュージアムは、「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境の発展過程を史的に探究し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」¹⁾とされている。エコミュージアムの基本要素には、「コアミュージアム」と「サテライト」等がある。コアミュージアムは、活動の中心拠点となり企画や実施を司るとともに、サテライトを紹介する場所である。サテライトとは、コアミュージアムの周囲に点在する要素で、フィールドミュージアムの「生きている展示場」として、解説、解説板などに工夫を凝らすことが望ましいとされている¹⁾。

本学では、実験研究棟 1 階がコアミュージアムの役割をもち「ブリコラ」と呼ばれ、馬介在活動センター（以下「うまセンター」）などがサテライトの役割をもち「ノード」と呼ばれている。

うまセンターでは現在、馬をパートナーとした教育、医療、福祉に関する活動を行っているが、フィールドミュージアムとして想定した場合、これまでの役割に加えて、ミュージアムへの来訪者に対しての解説機能を持つことが求められる。本学の卒業生である久保田は卒業研究において、うまセンターをノードとして想定した場合に考えられる対象者層のうち、「立ち寄り型利用者」に対して、常設的な野外解説板や印刷物が有効であると整理した²⁾。

これらを踏まえ、本研究では、フィールドミュージアム「OPEN AIR LAB」のノードであるうまセンターの「立ち寄り型利用者」に対応した展示パネルを制作し、解説機能を充実させることを目的とした。

2. 方法

「立ち寄り型利用者」とは、散歩等で立ち寄る近隣住民や大学への来客、イベント・プログラム時の付き添い保護者等、プログラムの参加目的でない、比較的短時間の利用者である。展示パネルの制作では、一般的な展示制作過程を踏襲し、表-1 のプロセスで制作した。

表-1 制作のプロセス

- (1) 素材、設置場所の検討
- (2) 計画案の作成、施設関係者への提案
- (3) ラフや模型の作成
- (4) 図面の作成
- (5) 試作版の制作、制作過程評価
- (6) 制作、評価

3. 結果

3-1 設置場所や景観への配慮

設置場所はうまセンターの既存のフェンスとし、展示パネルはフェンスに引っ掛けられるフックの仕様とした。配色は施設で既に使用されていた茶色を基本とした。

3-2 作成した展示パネル

本研究で制作したパネル類を表-2 に整理し、以下に概要をまとめた。また、各パネルの写真やデザインデータを資料として添付した。

表-2 作成した展示パネル

A. 情報パネル	A-1 今日の予定
	A-2 ふれあいの日案内板
	A-3 ふれあいの日だより
B. 解説パネル	B-1 馬の紹介
	B-2 馬に関する解説パネル

[A. 情報パネル]

A-1 今日の予定

目的：うまセンターの学生活動の発信
仕様：カードをその日の予定で掛けかえる。
素材：MDF 合板、「MILK PAINT」
大きさ：450×600 mm

A-2 ふれあいの日案内板

目的：イベントの告知
仕様：日付を耐水チョークで更新する。
素材：ラワンランバー、「MILK PAINT」
大きさ：600×450 mm

A-3 ふれあいの日だより

目的：イベント「ふれあいの日」の紹介
仕様：差し替え式で月 1 回に更新する。
素材：ラワンランバー、発砲塩ビ板
大きさ：297×420 mm

[B. 解説パネル]

B-1 馬の紹介

目的：現在飼育されている馬の紹介
仕様：フレーム式で馬の入れ替え時に更新する。
素材：ラワンランバー、ラミネートフィルム
大きさ：297×420 mm

B-2 馬に関する解説パネル

目的：馬に関する基本的な知識の提供
仕様：テーマに関して 3 つのパネルに分けた
素材：アルミ複合板

大きさ：420×594 mm

テーマ「馬と人のつながり」

人は馬と共に生活し、馬を理解する中で、つながりを築いてきた。

B-2-1 馬と人のつながり

人と馬の関係は深く、時代によって変化してきた。

B-2-2 社会生活する馬

馬は群れで暮らし、社会生活をする動物である。

B-2-3 調教はコミュニケーション

人は馬の社会性を活かし、馬と関わり合っている。

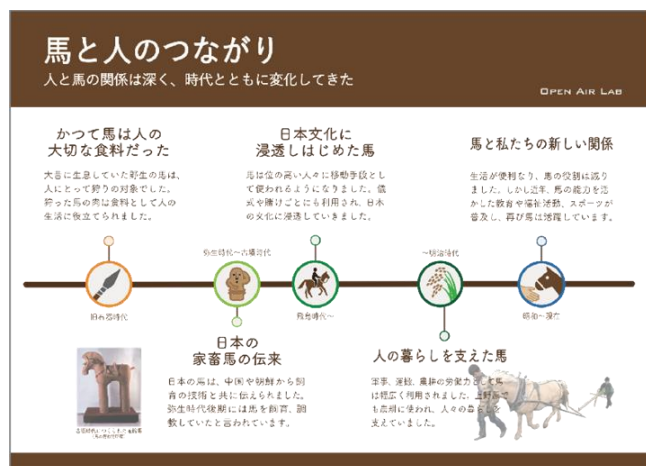


図-1 制作した展示パネル（B-2-1 馬と人のつながり）



図-2 設置した様子

3-3 その他成果物

更新が可能なパネルについて、学生が内容を更新しやすいようにデザインのテンプレートを制作した。また、展示パネルに統一感が出るよう配色サンプルも制作した（図-3）。

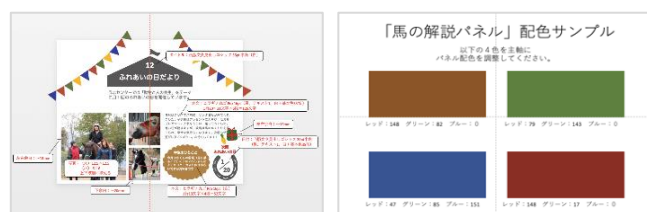


図-3 「ふれあいの日だより」テンプレート（左）
「配色サンプル」（右）

4. 評価、考察

試行的に展示し、うまセンター施設関係者から利用者の様子や展示パネルについてのコメントを得た（表-3）。また、利用者の利用状況を知るため、「ふれあいの日」に利用調査を行い、パネルの種類と見た時間を記録し、表にまとめた（表-4）。

表-3 うまセンター関係者からのコメント

コメント内容	
効果	・不在時でも利用者に情報発信が可能になった ・利用者に持ち帰ってもらう知識や情報が多くなった ・パネルがイベント参加者との会話につながった
デザイン	・色味や雰囲気が良いので、これを機会にうまCのデザインを変えていきたい
アイデア	・上野原市民と関わりのあるパネルがほしい ・裏戸にも馬の紹介パネルなどがあると通りがかりの人にも見てもらえる
改善点	・馬に近いところにパネルがあてほしい ・フェンスの低いところにかけてと見づらいため、設置の仕方に工夫が必要

表-4 「ふれあいの日」利用状況調査（1/20 実施）

利用者	見た時間(秒)	主に見たパネル	平均(秒)
大人A	10	B-1 馬の紹介	10
大人B	10	B-2 馬と人のつながり	
大人C	5	B-2 馬と人のつながり	
大人D	5	A-2 ふれあいの日案内板	
大人E	10	A-3 ふれあいの日だより	
大人F	20	A-3 ふれあいの日だより	28.8
こどもA	60	A-1 今日の予定	
こどもB	30	B-1 馬の紹介	
こどもC	5	B-2 馬と人のつながり	
こどもD	20	A-3 ふれあいの日だより	

うまセンター関係者からのコメントでは、展示パネルに対し、「立ち寄り型利用者への対応が可能になった」等のコメントを得た（表-3）。「ふれあいの日」利用調査では、付き添いの保護者が展示パネルを利用する様子が見られた。また、こどもや親子での利用も見られた（表-4）。

以上のことから、計画で想定した「立ち寄り型利用者」に、野外解説機能を補うことができたと考える。

5. まとめ、展望

本研究では、うまセンターのフィールドミュージアムのノードとしての役割を想定し、「立ち寄り型利用者」にむけた展示パネルを設置した。これにより、スタッフの不在時にも、「立ち寄り型利用者」にうまセンターや馬に関する基本的な情報の提供をすることが可能になった。今後、「馬に関する解説パネル」をシリーズ化し、上野原ならではのパネルを追加したり、ハンズオン展示を設置する等、メディアを追加していくことで、ミュージアムのノードとしての解説機能を高めることが望まれる。

参考文献

- 新井重三：エコミュージアム入門，p11，pp.13-16，1995
- 久保田心彩：インタープリティブ・プランニングの手法を用いたうまセンターの教育普及計画，帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科平成 29 年度卒業研究要旨，2018
- 近藤誠司：馬の科学，朝倉書店，東京，2016
- 近藤誠司：馬の動物学，東京大学出版会，東京，2001
- 近藤誠司、森雅之（絵）：ウマの絵本，農文協，東京，2009

- ⁶⁾ ジュリエットクラットン=ブロック著：馬の百科，あすなろ書房，東京，2008

謝辞

本研究にあたり、馬介在活動センター職員である喜久村徳淑先生、高野正幸先生、馬介在活動センター委員学生の皆様には、展示パネルを制作するにあたりご指導とご協力をいただきました。また、馬の博物館様、一般財団法人 C. W. ニコル・アフアンの森財団様から、馬の歴史に関する写真の提供をしていただいた。これらの方々と、指導教員である古瀬浩史教授、同研究室の皆様がこの場をお借りして感謝申し上げます。

資料：制作した展示パネル一覧

A.情報パネル	A-1 今日の予定
	A-2 ふれあいの日案内板
	A-3 ふれあいの日だより
B.解説パネル	B-1 馬の紹介
	B-2 馬に関する解説パネル

A. 情報パネル

A-1 今日の予定



A. 情報パネル

A-2 ふれあいの日案内板



A. 情報パネル

A-3 ふれあいの日だより



B. 解説パネル

B-1 馬の紹介



B. 解説パネル

B-2 馬と人のつながり

B-2-1 馬と人のつながり

馬と人のつながり

人と馬の関係は深く、時代とともに変化してきた

OPEN AIR LAB

かつて馬は人の大切な食料だった

大昔に生息していた野生の馬は、人にとって狩りの対象でした。狩った馬の肉は食料として人の生活に役立てられました。



旧石器時代



古墳時代につくられた埴輪馬
(馬の博物館所蔵)

弥生時代～古墳時代



日本の家畜馬の伝来

日本の馬は、中国や朝鮮から飼育の技術と共に伝えられました。弥生時代後期には馬を飼育、調教していたと言われています。

日本文化に浸透しはじめた馬

馬は位の高い人々に移動手段として使われるようになりました。儀式や賭けごとにも利用され、日本の文化に浸透していきました。



飛鳥時代～

～明治時代



人の暮らしを支えた馬

軍事、運搬、農耕の労働力として馬は幅広く利用されました。上野原でも農耕に使われ、人々の暮らしを支えていました。

馬と私たちの新しい関係

生活が便利なり、馬の役割は減りました。しかし近年、馬の能力を活かした教育や福祉活動、スポーツが普及し、再び馬は活躍しています。



昭和～現在



B. 解説パネル

B-2 馬と人のつながり

B-2-2 社会生活する馬

社会生活する馬

馬は群れをつくり、コミュニケーションをとってくらしている。

OPEN AIR LAB

人の手から離れて暮らしている野生化した馬の群れでは、多くのコミュニケーション行動がみられます。

群れの構成

十数頭の群れで生活します。群れで危険から逃げたり、草原の移動や子育てをしながら生活しています。

絆を深めるふれあい

馬同士で毛づくろいをします。結びつきを強めたり、「なだめ」のはたらきがあります。人にすることもあります。

仲間への声かけ

馬の鼻音や音声は、仲間や子馬を呼び戻すとき、無事を確認するときなどに見られます。



においを記憶する

においを覚え、仲間を嗅ぎ分けます。お世話する人のにおいも覚えています。



耳の2つの役割

耳は音を聞くだけでなく、他の馬にむけて気分や危険を伝える役割があります。



耳を前にたてる
何かを気にしています。



耳を前後にうごかす
まわりのいろんな音を聞いています。



耳をたおす
不安、恐怖、怒りを感じています。

参考資料 近藤誠司「ウマの科学」

B. 解説パネル

B-2 馬と人のつながり

B-2-3 調教はコミュニケーション

調教はコミュニケーション

馬をよく観察し、馬の社会性を活かして、かかわり合う。

OPEN AIR LAB



馬を理解する

調教はコミュニケーションを深める手段のひとつです。馬とふれあうときは、お互いを知ることから始まります。調教をするときも、馬のサインを読み取るよう心がけています。



いろいろな調教

うまセンターでは、馬の健康管理や、活動時の安全確保のために、毎日さまざまな調教をしています。



調馬索

人の声や動きに合わせて、走ったり歩いたりします。



ひき馬

人が馬に付きそい、呼吸を合わせて馬と歩きます。



乗馬

馬の上で、馬とコミュニケーションをとります。